

伊藤龍平著

『江戸の俳諧説話』

小林 幸夫

伊藤氏のこの近世説話論は、江戸の俳諧説話をめぐって書かれた口承文芸論の試みでもある。したがって著者の関心は、俳諧説話から伝説や世間話、あるいは昔話との交渉にまで及ぶ。俳諧説話の生成と伝承の形を追いながら、「世間話」をキーワードとして、口

伝説や世間話などの口承文芸とのつながりのうちに論じようとする試みはほとんどない。その意味では、この一冊を俳諧の専門家にも批判的に読んでもらいたい。「俳諧」とは何かを捉えなおすあらたな契機につながればいいと思う。

まずは本書の構成を見ておこう。

承世界とのつながりがたどられていく。和歌―連歌―俳諧の歴史と切り結びながら、俳諧説話が、どのように伝えられ作りかえられていくか。その変貌の過程を追うことが本書の眼目である。

もちろん俳諧説話を扱うからには、近世の俳壇と没交渉というわけにはいかない。伊藤氏もそのことは十分承知のうえで、俳諧研究の専門家ではないがと留保しながら、論をすすめていく。しかし、専門家ではないからこういう仕事ができただと私などは思う。俳壇史や作家論、作品論など、俳諧研究は細分化して精緻をきわめているが、俳諧説話を、

序 章 ―言葉のさきはふ国の近世―
第一章 和歌説話の末裔
第二章 俳人の逸話と話型
第三章 〆其角〰雨乞説話考
第四章 近世文芸と俳諧説話
第五章 俳諧説話集の成立
終 章 言葉のゆくえ

近世の俳諧隆盛の時代をむかえて、俳人の逸話から、和歌説話にその源を發する俳諧説話が作られ、手を加えられて編集されてい

く。近世という俳諧の時代が生んだ説話集の誕生である。おおきく俯瞰して眺めれば、こんなふうにして近世説話生成の動きが追跡されていく。その俳諧説話生成の過程をたどれば、伝説や世間話の口承文芸と深く交渉しながら、つながっていることがわかる。これが立論の立脚点である。故野村純一氏の指導のもとに、伝説や世間話研究などに携わってきた著者の基本姿勢がここにある。

では著者のいう俳諧説話とは何か。「俳諧及び俳諧師を題材とした」説話のことである。もちろんそれが説話である以上、俳諧師―たとえば芭蕉の実話である必要はない。あくまでも逸話として世間に伝えられてきた伝承的人物であり、伝承話なのである。俳諧説話を口承文芸として扱う著者の論点は、ここから生まれてくる。

意欲的な試みが行われる本書を、限られた枚数で紹介するのはむずかしい。いずれの章も長篇なので、論旨を追っていくと、些末になつてかえつてわかりづからろう。したがって各章の骨組みをスケッチするだけにとどめて、読者のための枝折りとしたい。

「第一章 和歌説話の末裔」

和歌の功德を語る歌徳説話の発想を受けて、「発句の徳」を語る「俳徳説話」。これに高名な俳人の逸話である「俳人説話」を加えて、この二つを俳諧説話と著者は名づける。

和歌には言霊が宿ると考えたように、発句にも靈妙なる力を認めて、その神秘的な力を語るのが俳徳説話である。「発句の徳」にしても「俳徳説話」にしても耳慣れないことではあるが、著者は、俳諧説話を和歌説話の系譜に位置づけて、そこから近世説話としての特徴を探ろうとする。俳諧説話が、世間話や伝説として流布伝承する過程が、さまざまな文献によって示され、追跡されていく。

たとえば後に其角の弟子となった秋色という女俳人は、十三才のときの「井戸端の桜の句」が、宮様の御感に入り、後に宗匠となる。桜は「秋色桜」と名づけられたという。これなども俳徳説話であるが、こうした俳人の逸話が、花見の席などで世間話としてもはやされ、果てはまことしやかに、井戸さえこしらえられて古跡として伝承される。こうして俳人の手柄を語る逸話は、世間話として

ひろがり伝説さえ作られる。和歌説話の末裔として生まれた俳諧説話と、口承文芸の交渉がたどられていく。

「第二章 俳人の逸話と話型」

俳諧説話は、その発想を和歌説話から受けつぐだけでなく、話型もまた踏襲する。たとえば西行や宗祇、そして芭蕉にまでつながる旅する修行者の逸話がそれである。

これもさまざまな類話によって話型が比較されるのだが、ここでは「乞食路通」の逸話を示そう。乞食のごとく行脚して俳諧修行する路通の一句が、芭蕉の認めるところとなつて入門を果たす話である。俳諧の徳を語る俳人の逸話であつて、旅する修行者の話型に収まる。古くから和歌説話にもこれに類する話は伝えられてきた。秀歌や秀句によつて、その正体が露見する説話である。この手の類話を数多く集めて、「乞食路通」の逸話が、俳人仲間の内に伝承されていたとする。俳人などの「文人グループ」が、説話の伝承母体であつたとするのである。

そのうえで伊藤氏は、この説話が「俳人仲間という世間で話された世間話であつた」と付け加える。もちろんこれらの話は、弘

法伝説や西行伝説のように広範囲な伝承圏をもつ話ではないが、俳諧仲間という「世間」に流通し伝播された世間話と考えるのである。

ここは少しわかりにくい。つまり「世間話」とは何か、という問題がある。しかしそれは後にふれるとして、伊藤氏は、俳諧師が世間話の伝承・伝播者であることを、類話を示しながら語るののである。

「第三章 其角雨乞説話考」

世間話の伝承・伝播者としての俳諧師、この見方は、俳人其角の「雨乞説話」を例証として、さらに詳細に論じられていく。この説話の分析を通して、世間話が伝説として定着する展開の跡がたどられる。

この「雨乞説話」は、其角が発句の力によつて雨をもたらず、典型的な俳徳説話である。この話も、和歌によつて雨を降らした小野小町の先例があるように、歌徳説話の話型にしたがつて作られた説話といつてよい。これが俳諧師のあいだに伝えられて、同時代の「俳人仲間」の逸話として語られれば、「俳人仲間という世間で話された世間話」となる。

論の焦点はこれから先にある。つまり「世

間話の伝説化」の過程が丹念にたどられていくのである。詳細は省略して、要点のみ簡単に整理してみる。

①発句の徳を語る其角の「雨乞説話」が、三囲稲荷の縁起として開帳の折に語られた。
②三囲稲荷を家の守り神とする三井家が、商売宣伝の具としてこの説話を利用した。

開帳の折には、其角の句掛け軸が、三囲稲荷の神威を示す証拠として示されたのである。証拠の「モノ」が示されて、其角の説話は伝説として信じられたのである。このようにして宣伝された其角「雨乞説話」は、異伝を生んで伝えられていく。「世間話の伝説化」の過程が、こんなふうになどられるのだ。

「第四章 近世文芸と俳諧説話」

それでは雨乞説話が、三囲稲荷や三井家とは無縁であったはずの其角に結びつけられるのはなぜか。著者は其角の俳諧説話、いわゆる「其角バナシ」が、なぜ人気を博し、巷間に流行したかの謎に答えていく。その答えを伊藤氏は、芭蕉の高弟にして臨機応変の頓才の持ち主であったところに求めている。この実否は問題ではない。むしろそういう人物として、其角は話の主人公になっていたの

である。たとえば「小便無用」の俳諧説話それである。

こうした「其角バナシ」が、俳諧好きの江戸の富裕町人の好みと合致して、講談や歌舞伎に取り込まれ、さらなる人気を博していく。有名な「忠臣蔵説話」もその一つ。其角の前句「年の瀬や水の流れも人の身も」に、大高源吾が「明日またるその宝船」と付けた話である。こういう「其角バナシ」が、講談や歌舞伎に取り入れられて、人情本として脚色される。こうなると「其角バナシ」は、俳人仲間の「世間話」とは言えなくなる。書き手の脚色加われれば、口承伝承の性格は失われて、創作文芸として変貌をとげるのだ。

「第五章 俳諧説話集の成立」

以上のような「其角バナシ」の伝説化の過程を踏まえたうえで、芭蕉説話を取りあげて、あらたな俳諧説話の生成が論じられている。発句の力で幽霊を成仏させる説話もその一例である。もちろんここに登場する芭蕉は、俳人というよりも、むしろ諸国を行脚する仏道修行僧のように、苦患に沈む人々を救済する。このような芭蕉像は、いわば説話の

享受者の手によって作りあげられた伝承的人物である。「芭蕉翁行脚怪談袋」は、さまざまな俳人伝承を取り込み、書き込みの手が加えられてきた芭蕉の奇談集である。このような説話集の成立に、俳諧説話をネタにした講談師や説教僧の関与を認めて、かれら舌耕の徒によって、諸国行脚の芭蕉像が生まれってきた。

「終章」では雑俳説話を論じて、この俳諧説話論集の幕は閉じられる。前句付けの雑俳と昔話との交渉が論じられて、「俳諧説話が昔話化」する近代への道程がたどられる。説話の管理者・伝播者としての講釈師・雑俳師の活動が、今後の説話伝承の課題として示されている。

説話とその類話をさまざまな文献を博捜して、この俳諧説話論は展開される。江戸の随筆や地誌を資料として伝説研究をすすめた先人に柳田国男がいるし、故野村純一氏も『江戸東京の噂話』（大修館書店）を著して、世間話研究の新しい方法を示した。伊藤氏はその方法をさらにおすすめて、近世説話研究はもちろん、口承文芸研究にも、あらたに

開拓すべき領域と方法があることを、われわれに示してくれた。若い研究者による意欲的な仕事である。

本書を口承文芸論として読むならば、専門外の読者のためにも、伝説と世間話の定義だけでも説明して、理解の助けとするほうが親切だと思う。伝説と世間話はどこで重なり、何がちがうのか。たしかに説明されていないわけではないが、まとまりなく散見するのでわかりにくい。世間話を「キーワード」とした論究であるならば、なおさらその配慮が必要であると思う。

伝説は、「歴史時間の一点に限定され、なおかつ土地との結びつきが密接である」であり、「形をとまなうモノ（事物）が必要」である。これに対して世間話は、「同時代の話」であり、「事物は必要ない」と説明される。しかし、こうした断片的な説明を読んだだけでは、たとえば、其角の「雨乞説話」が「世間話」であり、それが「伝説化」する過程は飲み込めるだろうか。「世間話の伝説化」や、「伝説の発生母体として世間話」という著者の主張もわかりにくからう。このことは、昔話・伝説・世間話・逸話を、「説話」とも総称しているが、その区別はあいまいでわかり

にくい、ということにもつながる。

著者が、「発句の徳」を語るものを俳徳説話に分類するのはいいとしても、近世の俳諧師たちは、「発句にも靈妙な力」を認めて、その「神秘的な力」を信じていたのだろうか。古代の言霊信仰を、近世の俳諧説話に導入して、その説話の性格を論ずることには、慎重を要するのではないか。むしろ「靈妙な力」があるかのように説話を作っていたとすれば、その作為の意図はどこにあるのか。俳諧師が、俳徳説話の伝播者であることを考えあわせれば、そこから俳諧研究や口承文芸研究の、どういう課題が生まれてくるか。本書を読んでいて、私などはそれが知りたくなつた。

もう一つ、路通や其角の俳諧説話が作られることと、当時の俳壇事情、俳諧師の生活事情とが、どうかかわっていたか。俳諧師が説話の伝播者とするならば、何のために彼らが、話を持って歩く必要があったのか。三囲稲荷や三井家が、神社の縁起を開帳に合わせで宣伝するために、其角説話を利用したことがよくわかったからこそ、なおさらそのことが知りたい。小林一茶などは宗匠としての暮らしを立てる苦心したと聞いている。それな

らば話を運ぶことが、彼らの属する俳壇とどのようにかわっていたのかどうか。これは俳諧師の生活の問題でもある。講釈師にしても俳諧説話を講談のネタにすることは、飯のタネでもあったはずである。

読後感の一端を述べたにすぎないが、これらのことは、もちろん、今後の課題として著者も承知しておられることと思う。

(二〇〇七年、本体八八〇〇円、翰林書房)

(こばやし・ゆきお／東海学園大学)